



Title	部分名詞を非主要部とする複合語から見た動詞由来複合名詞の叙述性再考
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 87-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

部分名詞を非主要部とする複合語から見た 動詞由来複合名詞の叙述性再考*

由本 陽子

1. はじめに

日本語には、(1)に挙げたような物の部分や性状を表す名詞（以下便宜上「部分名詞」と呼ぶ）が結合した複合形容詞が多く存在する。これらは、(2)に示すように、それらの名詞をBとすれば「AのB」で表されるAのような、所有者あるいは全体にあたる名詞を修飾する形容詞として用いられる。

(1) 筋骨たくましい、草深い、奥深い、意地汚い、意地悪い、きめ細かい、口うるさい、口汚い、口軽い、口堅い、目ざとい、腹ぎたない、腹黒い、耳早い、幅広い、かさ高い、数少ない、数多い、格式高い、香り高い、気短い、気長い、気前良い、鼻高い、腰高い、名高い、見目麗しい、欲深い

(2) a. 意地汚い人間（＝人間の意地が汚い）

b. 姑が口うるさい（＝姑の口がうるさい）

c. そういう例は数少ない（＝例の数が少ない）

d. 見目麗しい女性（＝女性の見目が麗しい）

また、形容動詞に関しても、同様の型の複合語は多い。これらについては、「口達者な(くちだっしやな)」のように連濁が起こっている場合もあるが、多くの場合、複合語のアクセントパターンを示さずそれぞれもとのアクセントを保持し、かつ二語の間にポーズをおいて発音される（「い^hみ | じん^hちょう」）ので、影山(1993)に従えば、レキシコンでの形成ではない可能性もあるが、本稿ではこの区別については取り上げず一応同類の複合だと考えて議論を進める。

(3) 頭でっかちな、口達者な、口まめな、種類豊富な、心身健全な、弁舌爽やかな、意味深長な、意味不明な、神経過敏な、学殖豊かな、色鮮やかな、意気盛んな

非主要部として部分名詞が結合している複合名詞も数多く見受けられるが、(4)に挙げたものは(5)に示すように「する」と結合すれば動詞として用いられる動名詞であるという特徴をもつ。

(4) a. 幅詰め、足きり、頭だし、色止め、骨きり、値上げ、格上げ、嵩上げ、底上げ、値下げ、格下げ、足留め、あく抜き、塩出し、目立て、口止め

b. 値下がり、値上がり、値崩れ、型崩れ、心変わり、代替わり、種切れ、息切れ、

*本稿は平成28年度科学研究費補助金基盤(C) (24520427 研究代表者：由本陽子) の援助を受けて行った研究成果の一部である。

色あせ、色落ち、気落ち

- (5) a. マクドナルドが商品を値下げした。
b. 水につけてゴボウをあく抜きする。 (伊藤・杉岡 2002:113)
c. 最近階段を上ると息切れする。

由本(2009)では、(1)-(4)のような複合形容詞・形容動詞や動名詞をクオリア構造 (cf. Pustejovsky (1995)) を含んだ語彙意味記述を基盤とした語形成として分析し、結合している部分名詞の構成役割から新たに作られる述語の項を掬いだすことによって成立しているものであると主張した。

由本(2009)では詳しく論じなかった型であるが、同じように部分名詞が動詞の連用形と結合している複合名詞で、動名詞としては用いられないが、具体物や出来事を表す純粋な名詞とは言えず、(3)のタイプと同様、「だ」あるいは「の」を付加すれば部分名詞の所有者に相当するものを叙述する形で用いられるものがある。以下(6)にその例を挙げる。どのような組み合わせでも許されるわけではなく、たとえば、「*先曲り (の杖)、*評判落ち (の店)」などは容認されないが、「上がり」「下がり」など一定の動詞連用形について生産性が認められる。これらの例は、名詞に前置される場合「な」が付加できないので形容名詞(形容動詞の語幹)とは言えないが、明らかに属性叙述の機能をもつものであり、伊藤・杉岡(2002:119)に従えば「述語名詞」と呼ばれるものに分類できる。

- (6) 先割れ (スプーン)、額面割れ (の債権)、(景気が) 先細りだ/先太りだ、尻上がり/
尻下がり (の語調)、尻すぼまり (のコップ)、(今年の新人は) 腰抜けだ、配当落ち (の株)、(太郎は) 目利きだ、尻切れ (の話)、期限切れ (のパスポート)、下膨れ (の顔)、
調子はずれ (の歌)、(彼の質問は) ピント外れだ

本稿が問題としたいのは、このタイプと以下の(7)に挙げるような述語名詞とがどのように異なるのかという点である。(7)の例も、「名詞+動詞連用形」で同じ形式であり、述語名詞として機能する複合語であるが、これらの非主要部は、部分名詞ではなく、主要部の動詞が表す行為の手段、道具 ((7a))、結果状態 ((7b)) など付加詞に相当するものや、動詞の内項とも考えられる材料 ((7c)) や場所 ((7d)(7e)) を表す名詞である。

- (7) a. 炭焼き (の肉)、機械編み (のニット)、(この服は) 手作りだ、天日干し (のスルメ)
b. 四つ割り (のスイカ)、(このキュウリは) みじん切りだ、白塗り (の壁)
c. (この箆笥は) 漆塗りだ、(表紙は) 革張りだ、(石造り) の塀
d. 箱入り (の本)、名入り (の手ぬぐい)、斑入り (の葉)、(このお酒は) 金箔入りだ、
泥まみれ (のシャツ)、内住み (の女中)、さや付き (のエンドウ)、ふた付き (のなべ)、
(このピーナツは) 皮付きだ、骨付き (の肉)
e. 水浸し (の床)、外付け (のモデム)、瓶詰め (のジャム)、箱詰め (のリンゴ)、
粕漬け (の魚)、(この白菜は) 塩漬だ

(6)や(7)の複合名詞が叙述機能をもつのはなぜだろうか? 2 節 3 節で詳しく見るように、伊藤・杉岡(2002)、Sugioka (2001)は、動詞の概念構造(LCS)内の State のレベルでの複合

は状態を表す述語名詞を形成すると説明し、State内に現れ得る付加詞ではない要素が結合している(7a)のタイプについては、作成動詞と使役変化動詞とに限り、動作から結果への焦点の移動によって例外的に認められると説明している(伊藤・杉岡 2002:121)。この分析に従えば、述語名詞となる複合名詞はすべて結果状態に焦点があたることによって形成されるものだと考えられるが、Sugioka(2001)、伊藤・杉岡(2002)では、(6)のような例は扱われていない。由本(2009)では、(1)-(4)のタイプと同様に、(6)も部分名詞のクオリア構造を利用して述語名詞が形成されたものであることを述べたが、詳しい分析は示しておらず、(7)のタイプの述語名詞とは区別して扱った。ここで再検討したいのは、果たして両者は異なるメカニズムによって形成されると言えるのかという問題である。本稿では、由本(2009)で示した分析を再検討し、「名詞+動詞連用形」型の複合語のうち、述語名詞としての叙述機能をもつものとして成立するための条件とは何かを統一的に説明することをめざす。

次節では、純粋な名詞を形成する場合と、動名詞や述語名詞として叙述機能をもつ名詞を形成する場合とでは異なる複合のメカニズムが関わっていると主張した先行研究を概観する。3節で本稿が特に注目する(6)と(7)のタイプを取り上げ、これらを統一的に分析すべきであることを主張する。さらに、先行研究では項構造レベルで形成されると考えられていた複合名詞についても、同じ方向性で分析するほうが妥当であることを示唆する。4節は結語である。

2. 「名詞+動詞連用形」型の複合名詞のカテゴリー：先行研究の概観

この節では、日本語の「名詞+動詞連用形」の型の複合語に関する先行研究として、杉岡(1998)、Sugioka(2001)、伊藤・杉岡(2002)と、その問題点を解決する代案を提案した Yumoto (2010)の主張を概観する。

日本語の動詞由来複合語には、行為・出来事もしくは具体物を表す純粋な名詞((8a)(8b))、「する」と結合して動詞となる動名詞((8c)(8d))、「だ」「の」を伴って名詞を修飾する叙述機能をもつ述語名詞((8e))というように、様々なカテゴリーのものがあるが、いずれも表面上は同じ「名詞+動詞連用形」であり、本稿が主に扱う第3のタイプのもは、「の」「な」を伴ってはじめて属性や特徴を現す形容動詞として機能できるのである(cf. 伊藤・杉岡 110-115)。

(8) a. 栗拾いをする、山登りをする、地鳴りがする、胸騒ぎがする

b. 梅干しを食べた、卵焼きを作ろう、屑入れを買ってきた、夜明けが近い

c. 切手を糊付けする、ドレスを手作りする、宛名をペン書きする

d. 肌が日焼けする、雪焼けした後のお手入れ、船酔いして辛かった

e. 魚が黒焦げだ、健の家は石造りだ、朝採りの苺、白塗りの壁

しかし、主要部の動詞の項がいかにか具現されるかについては歴然とした違いがある。もとの動詞が必須項をとる場合、行為を表す名詞(直接「する」が結合できないもの)の場合(9a,b)に示すようにその項を複合語内に具現することが義務的である。いっぽう、直接

「する」が結合できる動名詞や名詞を叙述する述語名詞の場合は、道具や材料を表す付加詞との結合による複合が一般的であり、(10)(11)のように語の外に必須項が具現される。

(9) a. {筆で宛名書き/*宛名の筆書き} をするのに3時間かかった。

b. 花子は3時間 {山でキノコ採り/*キノコの山採り} をした。

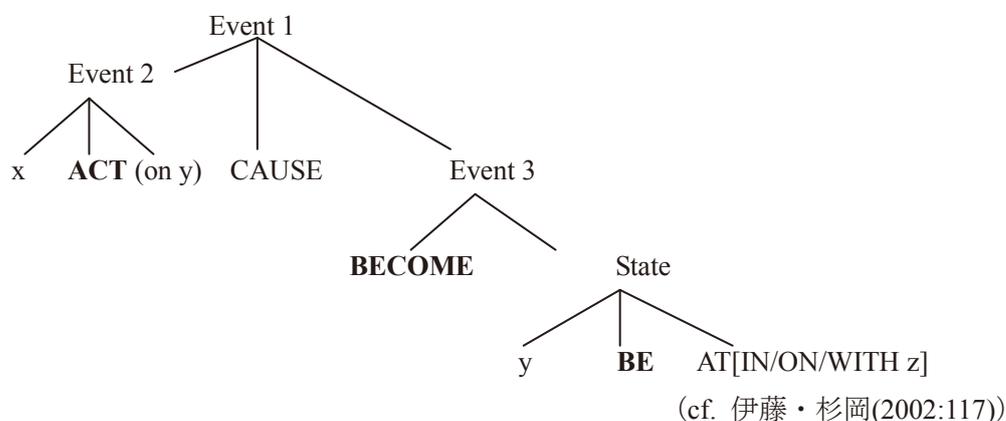
(10) 手紙をペン書きする。セーターを水洗いする。布団を天日干しする。

(11) a. ペン書きの手紙、花子のセーターは手編みだ。

b. レンガ造りの家、花子の本は革張りだ。

一見これらはすべて英語の動詞由来複合語と同様に項構造をもとにした語形成に見えるが、杉岡(1998)、Sugioka (2001)¹は、同じ動詞由来複合語でも、(8a)の出来事名詞として用いられるものと(8c, d, e)とでは、形成メカニズムが本質的に異なると主張した。²すなわち、前者は項構造を基盤とする英語の動詞由来複合名詞と同様、原則項との複合だが、後者はLCSを基盤とする付加詞との複合として区別されるべきだとの主張である。さらに、杉岡によれば、(8c, d)と(8e)のカテゴリーの違いは、結合している名詞がどのような付加詞として解釈されるかによって決まる。たとえば、道具を表わす名詞との複合語は(8c)のような他動詞、原因として解釈される場合は(8d)のような自動詞となり、結果状態を表わすと解釈される要素と結合した場合は(8e)のように述語名詞になる。動詞の事象構造が図1に示すようなLCSで表わされるとすれば、どの下位事象(Event, State)において現れる付加詞と結合するかによって、複合語の意味的、統語的カテゴリーが決まるというのである。

図1



具体的には、まず、Event 2 の ACT に選択される道具や様態を表わす要素、または、Event 3 の BECOME に選択される原因を表わす要素との結合では、動名詞として使われる複合語となる。このような語形成は、LCS で表わすなら、たとえば、「ペン書き (する)」は、[[x ACT ON y (with pen)] CAUSE [BECOME [y BE AT [IN WORLD]]]]のように、主要部動詞のLCSに下線部の付加詞を加えた形の複雑述語を形成するものとして捉えられている(cf.

¹ 杉岡(1998)と Sugioka (2001)、伊藤・杉岡(2002)で示された分析のポイントは基本的に違いがないので、以下「杉岡」とする。

² (8b)の具体物を表す複合名詞については、本稿の考察の対象外とする。伊藤・杉岡(2002:129)ではそもそも動詞由来複合語からは除外すべきものであると述べられている。

伊藤・杉岡 2002:124)。いっぽう、材料や結果状態を表す要素³は State 内の BE に選択されると考えられており、それらを結合すると述語名詞が作られると考えられている。

ここで、どのような付加詞なら述語名詞を作るものとして容認されるのか、具体例で確認しながら、杉岡の分析を検討してみよう。

- (12) a. 四つ切りのリンゴ、三つ折りの財布、この壁は黒塗りだ
b. 石造りの家、モヘア編みのセーター、この寺の屋根は瓦葺きだ
c. 黒焦げの魚、赤枯れの松、健はびしょ濡れだ
d. *手洗いのセーター、*早食いのパスタ、*ワックス拭きの車
e. セーターを手洗いする、車をワックス拭きする
f. *職人焼きのピザ、*母親作りのドレス、*男仕立ての着物 (=男が仕立てた着物)

まず、杉岡の観察によると、述語名詞として容認されるのは、(12a-c)のように作成動詞や状態変化動詞、すなわち図1の State を含む動詞を主要部としたものである。(12d)のように本来 State を含まないような動詞が主要部の場合、様態や手段、道具を表わす付加詞を結合させた複合語は述語名詞としては容認されず、代わりに(12e)のように動名詞として用いられる。英語の V-en 型を主要部とする複合語との重要な違いは、日本語では(12f)のように動作主と解釈される名詞との複合語が容認されないことであるが、この理由について、杉岡は、述語として用いられる動詞由来複合語はあくまで付加詞を結合することによって形成されるので、外項である動作主が現れる可能性がないためだと説明している。

杉岡の分析における重要な主張点は、非主要部が動詞の項か非項(すなわち付加詞)かということが複合名詞のカテゴリーを決定するということであつた。この主張に従えば、内項との結合によるものには動名詞や述語名詞として用いられるものはないことになる。

これに対して、Yumoto (2010)は、(13)(14)に示すように、省略できない動詞の内項に相当する名詞と結合した複合名詞で、動名詞として用いられる例が数多く存在することから、複合名詞のカテゴリーを決定する要因は、結合する名詞が項か非項かではなく、二語の意味合成の結果、語内で満たされない内項が残っているかどうかにあると主張した。

- (13) a. *(船に)救援物資を積む → 救援物資を船積みする
バック詰め、車庫入れ、棚上げ、湯通し、陸揚げ
b. このネタは*(客に)受ける → このネタは客受けする
親離れ、乳離れ、仲間入り、湯あたり、ベンチ入り
c. 大学に*(ランクを)つける → 大学をランク付けする
動機付け、色づけ、ワックスがけ、砂糖がけ、墨入れ
- (14) a. *(山菜の灰汁を)抜く → 山菜を灰汁抜きする
値上げ、底上げ、値引き、幅詰め、色止め、品定め、頭出し
b. *(セーターの色が)あせた → セーターが色あせした

³ 結果状態を表すものには、純粋な名詞ではなく形容詞語幹や副詞的要素も多い (e.g. 「黒焦げ、薄切り、固ゆで」)

気疲れ、気落ち、心変わり、格落ち、型崩れ、値下がり、底割れ

(13)の例は動詞が内項を二つ取る他動詞または自動詞で、いっぽうの項が結合して複合語が作られ、他動詞、自動詞いずれの場合も項が一つ減じられるが、もう一つの項が満たされないまま残っており、それが動名詞の項として受け継がれている。いっぽう、(14)のタイプは、結合する名詞がもとの動詞が選択する項である。これが語内で満たされているにも関わらず、動名詞として成立するのは、結合した名詞によって新たな項が獲得されているからである。結果として、動詞が直接選択するものではない名詞が動名詞の項として表されるのである。この新たな項は結合した名詞と部分-全体の関係にあることは明らかである。つまり、(14)のタイプは結合している部分名詞の性質によって述語としての機能を帯びていると考えられる。杉岡が注目した付加詞との結合による複合語の場合は、語内で項が満たされていないから、もともと動詞が選択する項がそのまま受け継がれた動名詞が形成されるわけである。Yumoto (2010)では、このような動名詞を作る複合のメカニズムを名詞のクオリア構造を組み込んだ語彙意味記述を用いて形式化した。その詳細は Yumoto (2010)を参照されたい。

部分名詞と動詞連用形の複合は、1 節で見たように、形容詞や形容動詞を主要部とするものにも生産性が認められる。以下にその例を再掲する。

- (15) a. 筋骨たくましい、草深い、奥深い、意地汚い、意地悪い、きめ細かい、幅広い、
かさ高い、数少ない、格式高い、香り高い、名高い、見目麗しい、欲深い
b. 頭でっかちな、口達者な、口まめな、種類豊富な、心身健全な、意味深長な、
神経過敏な、学殖豊かな、色鮮やかな、意気盛んな

由本(2009)では、これらについても(14)のタイプの動名詞について提案したと同様の分析が適用できると主張した。すなわち、主要部となっている形容詞・形容動詞の主語にあたる名詞と複合すれば、語外で満たすべき項はないはずだが、結合した名詞が部分名詞であるためその所有者(全体)に相当する名詞を叙述する述語として成立するということである。

次節では、このような先行研究の知見を踏まえて、本稿が問題にする「名詞+動詞の連用形」型の複合語で名詞が部分名詞であるものとそうでないものとを統一的に扱うべきことを主張する。

3. 「名詞+動詞連用形」型の述語名詞再考

2 節では結合する名詞が部分名詞である場合に、その名詞から創出される項を受け継ぐ新たな述語が形成され得ることを見た。この分析は、当然、(6)のタイプ ((16)に再掲) の述語名詞として用いられる「部分名詞+動詞の連用形」型の複合語にも適用されるべきであろう。

- (16) 先割れ ((の) スプーン)、額面割れ (の債権)、(景気が) 先細りだ/先太りだ、尻上がり/尻下がり (の語調)、尻すぼまり (のコップ)、(今年の新人は) 腰抜けだ、配当落ち (の株)、(太郎は) 目利きだ、尻切れ (の話)、期限切れ (のパスポート)、下

膨れ (の顔)、調子はずれ (の歌)、(彼の質問は) ピント外れだ
すなわち、結合している部分名詞は、以下に示すように、主要部動詞の主語にあたる項を満たすものであるが、部分名詞のクオリア構造において、その部分の所有者 (全体) に相当するものを新たな項として掬いだしそれを叙述する述語名詞を形成し得るということである。

(17) a. 先割れのスプーン ← スプーンの先が割れている

b. 太郎は目利きだ ← 太郎の目は利く

c. 調子はずれの歌を歌うな ← 調子がはずれた歌を歌うな

では、(7)に挙げたような部分名詞以外の名詞が結合している同じ型の述語名詞 ((18)に再掲) についてはどのように分析されるだろうか。

(18) a. 炭焼き (の肉)、つぼ焼き (のイモ)、機械編み (のニット)、(この服は) 手作りだ、
(この地方のスルメはすべて) 天日干しだ

b. 四つ割り (のスイカ)、(このキュウリは) みじん切りだ、白塗り (の壁)

c. (この箆笥は) 漆塗りだ、(表紙は) 革張りだ、(石造り) の塀

d. 箱入り (の本)、名入り (の手ぬぐい)、斑入り (の葉)、(このお酒は) 金箔入りだ、
(シャツが) 泥まみれだ、内住み (の女中)、さや付き (のエンドウ)、ふた付き (のなべ)、(このピーナツは) 皮付きだ、骨付き (の肉)

e. 水浸し (の床)、外付け (のモデム)、瓶詰め (のジャム)、箱詰め (のリンゴ)、
粕漬け (の魚)、(この白菜は) 塩漬けだ

杉岡では、述語名詞が形成されるのは図1の最下の階層 State 内に限られており、本来は(18b, c)のように、結果状態や材料を表す付加詞が結合して形成されるとし、(18a)のような手段・様態が結合している複合名詞が述語名詞として用いられ得るのは、作成・使役変化動詞を主要部とする場合に限られており、本来は図1の Event2 にあるこれらの動詞の焦点が結果事象に移動することによると分析している (伊藤・杉岡 2002:121)。つまり、このタイプは本来動名詞を形成するが、杉岡によれば、英語の受動分詞を主要部とする複合語 (e.g. pencil-written, charcoal-broiled) に対応するものであり、「受身に近い」操作が語彙レベルで起こることによって述語名詞の用法が生じていると考えられると言う。ところが、(18d, e)のように主要部の項にあたる名詞が結合しているものにも、述語名詞として用いられるものは多く見つかる。(18d)は主要部が自動詞、(18e)は他動詞の例である。以下にこれらがまさに項との結合によるものであることを示す。

(19) a. 箱入りの本 ← 本が *(箱に) 入っている

b. さや付きのエンドウ ← エンドウに *(さやが) ついている

c. 水浸しの床 ← 床を *(水に) 浸している

d. 瓶詰めのジャム ← ジャムを *(瓶に) 詰めてある

これらを含めて扱うには、杉岡の分析を修正し、必ずしも付加詞でなくとも図1の State 内に存在する項との結合であれば結果状態を表す述語名詞が作られ得るという説明が考え

られるであろう。(18d, e)の例においてその項は *z* である。しかしながら、この説明では、この場合の *z* との複合が、Event 3 のレベルでの複合で変化を表す「日焼け (する)」タイプの動名詞を作ることがないのかが不明である。実際、(20)に示すように、用いられる動詞に偏りはあるが、(18e) (18d)と同様に *z* にあたる内項が結合して動名詞として容認されるものも多く見つかる (cf. (Yumoto (2010)))。

(20) a. *本が箱入りする、*女中が内住みする、*シャツが泥まみれする

イチローがベンチ入りする、子供が乳離れする、子犬が仲間入りする

b. *床を水浸しする、?白菜を塩漬けする、ジャムを瓶詰めする、物資を船積みする、うす揚げを湯通しする

このように同じ関係性による名詞と動詞連用形の組み合わせで、動名詞になるものと述語名詞になるものに分かれる要因を杉岡の主張する LCS による分析に従って考えるなら、前者は図 1 で言えば ACT や BECOME に焦点があるもの、後者は State に焦点があるものという違いに帰せられるであろう。しかし、果たして述語名詞として用いられるものはすべて State に焦点が当たっていると言えるのだろうか?そもそも State を含まない動詞からは述語名詞が作られないという杉岡の主張は正しいのだろうか?

本稿では、いずれの観点からも杉岡の分析では、複合名詞の叙述性が容認される条件を説明するものとして不十分であると考え。(21)のような例を見られたい。

(21) a. 学校帰りの子供、酒飲みの学生、早送りの映像、会社勤めの夫、一人住まいの人、花子は人たらしだ、健は早起きだ

b. 罪作りな人だ、人騒がせな人、気がかりな天気

(21a)の例の中で、「帰る」は明らかに結果に焦点のある動詞であるが、「学校帰り」は学校から帰る途中の状況を表している。⁴また、「酒飲み、会社勤め、一人住まい」などは、主要部の動詞からは結果状態が含意されない。「早起き、人たらし、罪作り」を含め、これらは、結果状態というよりも、複合語によって表される行為によって特徴づけられる広義の「属性」を表すものと言える。⁵(21b)に示すように、「な」が付加され形容動詞として用いられ得るものについても、属性叙述の機能をもつ複合名詞においては State に焦点があるという特徴づけは妥当とは言えない。

以上の観察から、属性叙述の機能をもち得る動詞由来複合名詞は、LCS の State のレベルに限定されるということではなく、結合している名詞 (または形容詞・副詞の語幹) と動詞との意味合成によって新たに作られる述語概念によって、何らかの属性叙述の解釈が引き出せる限りにおいて、それ以外の Event レベルでも形成されると考えるべきであることが明らかになった。ただし、注意すべきことに、どのような組み合わせでも容認されるということではなく、主要部動詞の項構造による制約は見られる。

⁴ 「学校帰り」「早送り」などは、場面レベルの述語となっている珍しい例である。

⁵ 「属性」といっても場面レベルの解釈もあれば、履歴属性 (cf. 益岡 (2008)) の場合もある。詳しくは由本(2015:102-103)を参照。

- (22) a. 罪作りな人 / 手作りのケーキ / ??健は手作りな人だ (=何でも手で作る人)
 b. そのジャムは瓶詰めだ / *この瓶はジャム詰めだ
 c. 学校帰りの子供 / *子供帰りの学校 (=子供が帰った後の学校)
 d. 花子は田舎育ちだ / *花子は(子供の)田舎育てだ

(22a,c)が示しているのは、まず、内項をとる動詞を主要部とする場合、内項と結合するなら外項(「人」「子供」)を叙述する複合語になるが、内項と結合しないなら、内項を叙述する複合語としてしか成立しないということである。⁶(22b)から分かることは、内項を二つとる動詞の場合、対象項として解釈されるものの方が優先的に叙述の対象(主語)として選ばれ、もう一つの内項である場所項が結合した複合語が形成されるということである。(22d)は、自動詞なら、付加詞である場所を表す名詞が結合して外項を叙述する複合語を作ることができるのに対して、他動詞となると対象項が必須項であるため、対応する複合語が容認されないことを示している。すなわち、述語名詞(ないしは形容名詞)の容認性は、動詞の項が語内あるいは、叙述対象として適切に具現されることが条件となっているのである。

この条件は、部分名詞を結合して作られている(16)のタイプについても共通に適用されるものと考えられる。なぜなら、これらの主要部となっている動詞はすべて一つしか項をとらない自動詞であり、だからこそ、その項は語の内部で満たしたうえで、部分名詞の「所有者」にあたる名詞を新たに項として叙述対象とすることができるからである。他動詞を主要部として部分名詞を結合した複合語は、動名詞としては成立しても、(23)に示すように述語名詞として用いることが難しいのは、この項の具現に関する条件を満たさないからだと考えられる。

- (23) ??値下げの商品、??裾上げのスカート、??この山菜は灰汁出した

この条件を満たす限りにおいて、どのような複合名詞も理論的には叙述機能を認められるので、(22a)の「罪作り」と「手作り」のように、同じ動詞を主要部として異なるタイプの述語名詞(ないしは形容名詞)が作られることもあり得るのである。

述語名詞(ないしは形容名詞)による叙述がどのような解釈を得るのかについては、杉岡が提案したLCSを用いた分析と由本(2009)によるクオリア構造を導入した分析によって説明されなければならない。主要部の動詞が本来有する事象構造と、結合した名詞のクオリア構造の合成により得られる述語名詞の意味構造において、叙述対象として選ばれる項がどのように位置づけられるかが、解釈のポイントとなる。この点についての分析は別稿に譲るが、その解釈メカニズムは本稿で扱ったすべてのタイプの述語名詞(および形容名詞)に共通なものだと考えられる。

4. 結語

本稿では、日本語の「名詞+動詞連用形」型の複合語のうち、まず、名詞が部分名詞の

⁶ 「帰る」が非対格自動詞だとすれば、(22c)の対立は、(22b)と同じ説明が適用できる。

場合に注目し、その場合、名詞のクオリア構造を利用して述語として機能する複合語が形成されることを見た。次に、この型で述語名詞ないしは形容名詞として用いられるもののうち、動詞の LCS 内の State を表す複雑述語を形成するものに限定して杉岡が提案した分析の問題点を指摘し、これらと、名詞が部分名詞であるタイプ、さらには、結果状態を含意しない動詞を主要部とするタイプとは、同じ条件のもとに属性叙述の機能が認められていると考えるべきであることを述べた。いずれの場合も、原則、動詞の項を適切に具現する形で、複合語内に現れる名詞と叙述する対象（主語）が選ばれる必要があり、複合語内で満たされず語の外に具現されるべき項を有する限り、どのような LCS をもつ動詞か、あるいは、結合する名詞が動詞の項か付加詞かということに関わらず述語名詞が形成され得ることを主張した。述語名詞がどのような解釈を得るかについては、クオリア構造を含む詳細な意味記述を用いて分析する必要があるが、その解釈メカニズムも、すべてのタイプの述語名詞に共通のものだと考えられる。詳しい分析は今後の課題とする。

References

- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 東京：研究社。
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房。
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論にむけて」 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 3-18. 東京：くろしお出版。
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 杉岡洋子 (1998) 「派生語における動詞素性の受け継ぎ」, 久野暲・柴谷方良(編) 『日本語学の新展開』 167-185. 東京：くろしお出版。
- Sugioka, Yoko (2001) Event structure and adjuncts in Japanese deverbal compounds. *Journal of Japanese Linguistics* 17:83-108.
- 由本陽子 (2009) 「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 209-228. 東京：くろしお出版。
- Yumoto, Yoko (2010) Variation in N-V compound verbs in Japanese. *Lingua* 120:2388-2404.
- 由本陽子 (2015) 「「名詞+動詞」複合語の統語範疇と意味カテゴリー」 益岡隆志 (編) 『日本語研究とその可能性』 80-105. 東京：開拓社。